

古代日本の神「ナル カミ」について

大 西 昇*

On the ancient gods NARUKAMI of Japan

Noboru OHNISHI

Some gods of ancient Japan consult the unknown gods about the serious matter (uranahu). These gods are “narukami”. “Naru” is one of the most important ancient Japanese words. “Naru” has no more the same meaning of “become” or “werden” than “shizen” has that of “nature” or “Natur”.

Natural Science と Technology が、われわれの生活環境と生活様式を、百年以上前から劇的に変化変質させ、作り出している現代日本社会においても、時として、いわゆる Animism の残存や Animism 的事象が指摘されることがある(註1)。その当否をしばらく置くとしても、そう言われることには全く理由がない、とは言い切れないところがある。それどころか、この Animism の問題は、いわゆる「日本的なるもの」の探求には避けて通れない関門の一つと考えられる。

小論はそのような関心を動機の一つとする、古代日本におけるある特別な発想に関する一試論である。ただしそれはあくまで動機に留まり、その課題を直接扱うものではない。従ってここでは資料と記述は原則として古代日本に限られる。(註2)

(1) 問題の所在—ナルとウラナヒをするカミ

日本の古代文献、記紀などに登場し活躍するカミガミの多くが、カミ ナル、あるいはナル カミ

と記されていることは周知のことである。

古事記を例に取ると、次に見るように、(1)カミ ナルから(2)(イザナキ・イザナミ二神による)カミ を ウム、次に再度(3)カミ ナルというように展開していく。

- (1) 天地初めて發(ひら)けし時、高天の原に成れる神の名
- (2) [二神] 次に海の神、名は大綿津見神を生み
- (3) [イザナキ] 左の御目を洗ひたまふ時に、成れる神の名は、天照大御神

そこで基本的な働きをしている動詞を挙げると、(1)ナル、(2)ウム、(3)ナルであるが、注意すべきは、(3)に於てもイザナキが「ウム」と表現されていることである。(3)の引用文の直後でイザナキは「吾は子生み生みて、生みの終に三はしらの貴き子を得つ。」と述べている†。つまり、(1)のナルは、「何か」がいわば〈ならせた〉、あるいは、〈うんだ〉とも表現されていないが、(3)のナルは〈うむ〉と表明された場で使われている、ということになる。

†: 以上の点については、丸山眞男が既に詳細な検討を行っていて、そこでは検討すべき点のほとんどが挙げられている(註3)。それを承けて、その作業のさらなる論理化深化と、氏とは異なる

* 東京工芸大学工学部基礎・教養非常勤講師
2000年9月26日 受理

視点からも見ていくことは、われわれの課題である。

さらにこのカミは次のような特異な点を持っていることにも注目したい。

すなわち、(α)カミ ナル に加えて

(β)カミが占いをする(ナル カミ総てということではない)

まず、これら二つの「特色」の関連を視野に入れつつ、古代日本のナル カミの構造をさぐり、その発想の解明への一步を歩み出すことにしたい。

そこで、αの「カミ ナル」からすると、当然古代語ナルの発想と意味内容の分析が要請されるが、この作業は後に見るようにβにも深くかかわっているのである。しかし、この作業はそれほど容易に済むような作業ではない。その理由の一つは、日本語にとってナルはその基本的な働きをする語として、古代だけではなく現代に至るまで根源的な役目を担っていると予想されるからである。従ってこの小論は、ナルにしるナル カミにしる、その見通しの一端を検討するに留まる。

我々はこの試論を上記の「古代語ナルの発想と意味内容の分析」作業、さらにはその発想を抽出して論理化する、つまり「ナルの論理」(註4)とでも言うべきものを抽出し外在化する作業の一環と考えており、そのため原理的なものを求める作業にならざるを得ない。

カミについてここで追記すれば、古代日本語ナルの構造解明が出来て初めて古代日本のカミが適切に捉えられる、と考えられるのである。

(2) ナルとナル カミ

ナルは大まかに分けると、二つの用法である。(註5)

[N 1] A がナル。

[N 2] X が A にナル

その [N 1] は以下に見るように二つに分類される。

[N 1-1] 「カミ」がナル。【天地初めて發りし

時、高天の原に成りませる神の名は、天之御中主神】天地初發之時。於高天原成神名。」記上

[N 1-2] 実ミがナル。【橘は己が枝枝になれれども】那例例騰母」天智紀歌謡 125

[N 2] (A とは別の)X が(変化して)A にナル。【其の聖(はに)と屎(くそ)とは、石と成りて今に亡せず。】其聖與屎成石」播磨國風土記 神前郡聖岡里

カミガミが次々に成っていく形態の多い [N 1-1] のナルは、外形的には [N 1-2] の「実がナル」に近く、[N 2] の変化の形態を取るカミもあるが少数である。つまりナル カミは、

(K 1) (ただ)カミがナル(のみ)

(K 2) 何かに困ってナル

(K 3) ある場所に(於)ナル

(K 4) ある時にナル

の形態のいずれかを取る [N 1-1] の形式であり、

5 番目として [N 2] の形式の、

(K 5) 何かがカミにナル

がある。

さらに、ナル カミと限定しないと、カミの分類は次の二つを加える。

(K 0) X はカミである

(K 00) (私は)~のカミである(託宣)

以下にその実例を挙げる。†

K 1: 【天地初めて判るときに、始めて俱に生(なりい)づる神有す。國常立尊と號す。】始有俱生之神」神代紀上第一段一書第四

K 2: 【葦牙(あしかび)如く萌え騰る物に困りて成れる神の名は、宇摩志阿斯訶備比古遲(うましあしかびひこぢの)神】如葦牙因萌騰之物而成神名」記上

K 3: 【天地初めて發けし時、高天の原に成れる神の名は、天之御中主神】於高天原成神名」記上

：【殺さえし迦具土神の頭に成れる神の名は、正鹿山上津見神。】所殺迦具土神之於頭所成神名」記上

K 4: 【是に左の御目を洗ひたまふ時に、成れる

神の名は、天照大御神。】於是洗左御目時、所成神名、天照大御神。」記上

K 5:【乃ち吹き撥ふ氣(いき)、神と化爲(な)る。號を級長戸邊命と曰(まう)す。】乃吹撥之氣、化爲神」神代紀上第五段一書第六

K 0:【所塞(ふさ)がる磐石(いは)といふは、是泉門(よみど)に塞(ふたが)ります大神(おほみかみ)を謂ふ。亦の名は道返大神(ちがへしのおほみかみ)といふ。】所塞磐石、是謂泉門塞之大神也。亦名道返大神矣。」神代紀神代紀上第五段一書第一

K 00:【是に答へて曰しけらく、「吾先に問はえき。故、吾先に名告りを爲む。吾は惡事(まがこと)も一言(ひとこと)、善事(よごと)も一言、言ひ離つ神、葛城の一言主(ひとことぬし)の大神ぞ。」とまをしき。】於是答曰、吾先見問。故、吾先爲名告。吾者雖惡事而一言、雖善事而一言、言離之神、葛城之一言主大神者也。」雄略記

†:このナル カミの分類 K 1~K 5 は、結局すべて K 1 に収まるのではと予想されるが、その検討はこの小論後の作業である。ナルの詳細な分類も同様な事情にある。(言うまでもなく、その前に、K の各々の分析が必要である。例えば K 2 の「因って」の意味もそれほど明確ではない。従ってこの分類は一時的な不十分なものであり、原文の表現の実際では、それぞれが明確に分離しているとは限らず〔特に時と場所〕、重なる場合が多い。)

(3) カミのウラナヒ一余白

いわゆる三貴子の誕生は、神代紀の第五段の一書では、イザナキの「意志」によって(ウマム)始まるが、その実際の誕生ではナルと表現されている。そしてそのイザナキ・イザナミ二神も神世七代の最後にナレルカミ(成神)である。「誕生」の語の使用は便宜的である。適切な語であるかはまだ確かではない。)

以下原文でその実際を見てみよう。

先ず、神代紀上の第五段の一書の一では、【一書に曰はく、伊奘諾尊の曰はく、「吾、御寓すべき珍の子を生(う)まむと欲ふ」とのたまひて、乃ち左の手を以て白銅鏡を携りたまふときに、則ち化(な)り出づる神有す。是を大日靈尊と謂す。】一書曰、伊奘諾尊曰、吾欲生御寓之珍子、乃以左手持白銅鏡、則有化出之神。其謂大日靈尊。一書曰、伊奘諾尊曰、吾欲生御之珍子、乃以左手持白銅鏡、則有化出之神。其謂大日尊。」

古事記では、

〔イ〕【〔イザナキ〕國土を生み成さむと以爲(おも)ふ】以爲生成國土」

〔ロ〕【是に二柱の神、議りて云ひけらく、「今吾が生める子良からず。猶天つ神の御所に白すべし。」といひて、即ち共に參上りて、天つ神の命を請ひき。爾に天つ神の命以ちて、ふとまににうらなひて、詔りたまひしく・・・】爾天神之命以、布斗麻邇爾ト相而詔之」

〔ハ〕【是に左の御目を洗ひたまふ時に、成れる神の名は、天照大御神。次に右の御目を洗ひたまふ時に、成れる神の名は、月讀命。次に御鼻を洗ひたまふ時に、成れる神の名は、建速須佐之男命。・・・此の時伊邪那伎命、大く歡喜びて詔りたまひしく、「吾は子生み生みて、生みの終に三はしらの貴き子を得つ。】於是洗左御目時、所成神名、天照大御神。次洗右御目時、所成神名、月讀命。次洗御鼻時、所成神名、建速須佐之男命。・・・此時伊邪那伎命、大歡喜詔、吾者生生子而、於生終得三貴子」

上に抽出したものは三貴子誕生までの展開の大筋であり、特に〔ロ〕では、二神は始めにクニをウミ、次にカミをウムとされているが、それ以後は「カミはナル」に移行して、最後に(紀の一書)のようにウムの語を使用せず三貴子がナルとされる〔ハ〕へと展開する。

そこで〔イ〕～〔ハ〕の問題点を挙げると、

(あ)ウマムとの表明からナルへ移行する。

(い)二神はいわば自己決済せずに、天つ神の命を請い、その天つ神はフトマニにウラナフ。

(う)三貴子の「誕生」をナルと表現した直後に、イザナキは「吾は子生み生みて、生みの終に

三はしらの貴き子を得つ。」と宣言する。

(あ)と(う)はナルの問題でありその検討は次章にゆずる。

そこでここでは(い)を少々見ていくことにしたい。

次の例はウケヒである。

根の國に追放されるスサノヲノミコトとこれを迎える天照大神の件で、

【「おのおのもうけひて子生まむ」・・・吹き棄つる気吹の狭霧に成りませる神の御名は、多紀理毘売の命。】各字氣比而生子・・・於吹棄氣吹之狭霧所成神御名、多紀理毘賣命」記上

これもウケヒ+(ウム+[意志の助動詞]ム)→ナルという図式であるが、ウケヒを、仮に、神意を問う事と理解すると、天照大神のウケヒとはどういうことか、という疑問も生ずる†。

†: 従ってここでのナルはアマテラス、スサノヲ両神のウケヒという「場」での表現として、「何故天照大神はウケヒをするのか。」という方向からも考察しなければならない。これは1章の α と β 、すなわちナルとウラナヒをするカミ、が関連していることを示唆する一例である。

よく指摘されるように、天照大神は皇祖神であると共に神を祭る巫女でもある性格を持っているが、しかし記紀において中心的役割を担わされている神が、皇祖神と巫女の両面を持っているという指摘だけでは、そのいわゆる〈最高神〉が何故ウケヒをするのかには十分答えてはいない。

和辻哲郎はかつて、これらのことに注目して、記紀に登場する神々を、祀る神、祀るとともに祀られる神(天つ神)、祀られるのみの神(山河の神)、祀ることを要求する崇りの神の4種類にわけ、〔口〕の「布斗麻邇爾ト相而」の天つ神や天照大神は「祀るとともに祀られる神」に属し、その神がウラナヒをすることはさらに不定の神の意志を問うことであり、それは天つ神や天照大神が背後の規定されない不定の神、つまりは神とは把握されなかったところの〈神聖なる「無」〉の意志の「通路」となっていることを示す、とした。

(註6)

そこでこの天つ神や天照大神がウラナヒをするという問題を、我々は和辻哲郎とはいささか異なる視点からも見ていくことにしたい。それをここで端的に言えば、和辻哲郎の「通路」の可能性の根拠を問う、ということである。(勿論和辻哲郎は氏自身の解答を提出している。)

問題は、記紀などに於ける、カミに関する発想とその表現方法にある。事態が最高神の意志決定を要求しているような局面で、カミがウラナヒをすると表現され、そのカミの最高決定権を示すような直接表現はなされていない。これらの理解として例えば、ある社会的条件の反映であるなどの解釈が可能であろう。しかしその解釈をたとえ認めたとしても、それだけでは、カミをそのように表象し表現することの説明にはまだ不十分なところがあると考えられる。

ウラナヒが「何らかのカミの意志」を知ろうとする行為であるとすると、ウラナヒの主体がカミである場合は、みずからの意志の自らによる完全な遂行はない、ということを示唆している。場合によっては、自分自身の意志は無い、とすら受け取れるように表現される。するとこのカミのいわば〈計画書・企画書〉には書かれていない《空白部分》があるということになる。ここで一応考えられることは、ウラナヒに示された別のカミの意志がその空白を埋める、ということであろう。その場合、何のカミであるか明確な場合もあるが、不明の場合が多い。この「不明」「不定」とされた古代日本の神の特徴にも、さらに、空白部分を見ることは可能であり、古代日本のカミはその意志を完全には遂行しようとしなかった場合がある、ということを示している。

以上をまとめると、

- 1) カミの計画書(意志)には書かれていない空白部分のある場合がある。
- 2) それはカミの意志遂行の不完全性つまり意志の部分的放棄を語る。すなわちカミは十全な意志の所有者ではない。これは日本古代のカミの「意志のかたち」である。
- 3) その空白部分を仮に「余白」と呼ぶことにす

る。

これらのカミに関する表象や表現はオノヅカラとナルという古代日本語に深く関わっていると考えられるのであって、次の二章で(あ)と(う)の問題点であるナルを検討することにした。

(4) ナルの分析 1—文字・訓から

まず、(あ)や(う)などに伏在する問題点の検討の前に、ナルと、その伏在する問題に強く関連するツクル(補助資料としてナス)の語の文字と訓の検討から始める。以下の文字とその訓は記紀風土記万葉集におけるものである。(註7)

[1] ナルと訓まれている字(*はツクルとも訓まれる)

成*, 生, 作*, 造*, 爲*, 化, 化成, 化生, 化爲, 化而爲, 變, 實, 成熟, 熟, 經*, 至, 濟, 滿, 臨, 登, 結, 就, 沒, (體勢)

[1-1] ナリハヒ

農, 農業, 業, 農作, 作田, 耕, 耕種, 稼, 稼穡, 生業

農時(なりはひのとき), 農績(なりはひをうむこと)農桑(なりはひこかひ・なりはひくは・なりはひのとき)

[1-2] ツクルとは訓まれない字

生, 化, 化成, 化生, 化爲, 化而爲, 變, 實, 成熟, 熟, 至, 濟, 滿, 臨, 登, 結, 就, 沒

[2] ツクルと訓まれている字

作*, 爲*, 成*, 造*, 造作, 造形, 起造, 營造, 供造, 製, 制, 經*, 經營, 營, 構, 構造, 修, 修理, 理, 修營, 繕, 修治, 治, 耕, 佃, 供佃, 割, 興, 起, 拱, 了

[2-1] ナルとは訓まれずツクルのみの字

造作, 造形, 起造, 營造, 供造, 製, 制, 經營, 營, 構, 構造, 修, 修理, 理, 修營, 繕, 修治, 治, 佃, 供佃, 割, 興, 起, 拱, 了

[3] ナスと訓まれている字

成, 作, 造, 爲, 生, 如, 變, 化, 化生, 就, 治

[3-1] ナル, ナスと訓まれる字

成, 作, 造, 爲, 生, 如, 變, 化, 化生, 就

[3-2] ツクル, ナスと訓まれる字: 治

[3-3] ナスのみ: 如

[4] 共通する字(ナルともツクルとも訓まれる字)

成, 作, 爲, 造, 經, 耕(「ナリハヒ」がナルと関連している語とすると、ここに分類される(註8))

[α] ナルともツクルとも訓む字: 成, 作, 造, 爲, 經, 耕

[β] ナル, ナス, ツクルと訓む字: 成, 作, 造, 爲

以下に α の6文字の訓を挙げる。()内は他の字と組み合わせられた例

1)成: ナル, ナス, ツクル, トゲル, ミノル, (ヒトトナリ)

2)作: ツクル, ナル, ナリハイ, ナス, スル, ヨム, ハク, ユフ, カタス, ウツ, ハガス, マシマス, クフ, モツ, オコル, オコス, ホル, (ミタツ)

3)造: ツクル, ナル, ナス, タツ, ワザ

4)爲: ナル, ツクル, ナス, ス, オモフ, マシマス

5)經: ナル, ツクル, アル, フ, フル, アフ

6)耕: ツクル, タツクル, タカエス, ナリハヒ

以上は完全なものではないが、記紀風土記万葉のほとんどの字例訓例を含んでいる(註9)。これらの用例から知られること、考えられることは少なくないが、ここでは特に次のようなことに注目したい。

(a) とりわけ [4] に注目すると、成, 作, 造, 爲, 經, 耕の6字はナルともツクルとも訓まれており、そのうちの成, 作, 造, 爲の4字はナスとも訓まれる。そうすると、まず次のようなことなどが考えられよう。

(a1) 現代日本語におけるほどにはナル, ツク

ル、ナスの3語の距離が無く、その意味内容と基本的な発想が現在とは相違する面があるであろうことを予想させる。と言って、現在の3語にそれらの相違面が全くない、というわけではない。これは微妙な問題であって、丸山眞男の「執拗な持続低音」と関係してくる問題である。

(a2) ツクル、ナスのような有意志の語を表示する字がナルとも訓まれていることは、その「有意志」ということ、つまり人間の意志の(環境世界と人間社会に対する)姿勢を検討すべき問題として提起している、と考えられる。(後でこの点をタツクリとナリハイを例にして検討することにする。)

(b) しかし、3語に差異がないというわけではないから、(1-2)〔ナルと訓んで〕ツクルとは訓まれない字(生、化、化成、化生、化爲、化而爲、變、實、成熟、熟、至、濟、滿、臨、登、結、就、没)と、(2-1)ナルとは訓まれないツクルのみの字(造作、造形、起造、營造、供造、製、制、經營、營、構、構造、修、修理、理、修營、繕、修治、治、佃、供佃、割、興、起、拱、了)を比較対照すると、

(b1) うまれる、実がなる、変化する、などはナルに含まれ、ツクルには属さない。

(b2) 丸山眞男がキリシタン文書『妙貞問答』を引いて、日本語「つくる」は、建築・修理・加工のイメージに基礎をおいている、と述べているようなところに(註10)、ツクルのみの(2-1)の意義は近いかも知れない。しかし、このことは、古代日本語としてのツクルの意味が建築・修理・加工に留まらない、ということを示唆している。(ここでいささか先走って言えば、『妙貞問答』の線上のツクルは、「人間のすること」という範囲内に限定された意味になる嫌いがある。)

(b3) ナル、ツクルとは訓むがナスとは訓まれない經、耕の二字の内、とりわけ後者の「耕」に注目すると、耕はツクル、タツクル、タカエス、ナリハヒなどと訓まれており、耕種の訓もナリハヒである。佃、供佃はツクル、タツクル、その他耕田(タツクル)耕佃(タツクル)供佃(ツクル)と訓まれている。従って、これらの訓は農作業に関連

した語群と見られる。一方(1-1)のナリハヒと訓まれている字には、農、業、生業、農業、農作、作田、耕、耕種、稼、稼穡などが含まれていて、そこには先に言及した「有意志」を表す字が見られ、それらをナルの関連語のナリハイと訓んでいることには示唆するところが大きい。次の用例などを見ると、タツクリは土を掘り起こし、耕す行為などを意味していると推測できる。

【盟酒(うけひぎけ)を醸まむとして、田七町を作るに、七日七夜の間、稲、成熟(な)り竟へき。】爲之釀盟酒作田七町七日七夜之間稻成熟竟
播磨國風土記 託賀郡賀眉里

すると、タツクリ+ナルでナリハイになる、との解釈も可能である。同一字をタツクリとナリハイと訓むことは、そこでのツクルがナル(ハタラキ)をいわば必要としている、ということを示唆していて、古語のナリハイは農作業と収穫を合せた意味〔全生活〕であるとの解釈も可能であろう。従ってここでは「ツクル+ナル」で事柄を表す場合があるということである。

以上のようなことが、字例に限ってであるが、まず考えられるところであろう。(註11)

なお「ナル カミ」のナル字については、

〔古事記〕成、所成、生、爲〔日本書紀〕化爲、化、爲、化生・生(なりいづる)

となっており、ナル カミのみではなく、ナル一般としても、使用された字による意味内容の相違の問題が存在するが、この小論の検討範囲内ではそれほど問題にはならないことが多く、問題が生ずる場合にのみ検討することにする。また古事記と日本書紀を全く同じ条件で扱うことにも問題があるが、同様にここで問題になる限りで取り上げるに留めることにしたい。

(5) ナルの分析 2—用例から

次にあげる神代紀上では、ツクルからナス、ナスからナルへと変遷する。

【むかし大己貴命、少彦名命に謂りて曰はく、「吾等が所造(つくれ)る国、豈善く成せりと謂は

むや」とのたまふ。少彦名命対へて曰はく「或は成せる所も有り、或は成らざるところも有り」とのたまふ。】嘗大己貴命謂少彦名命曰、吾等所造之國、豈謂善成之乎。少彦名命對曰、或有所成。或有不成。」神代紀上 第八段 一書の六

これで見ると、「成せる」つまりナスは「成る」と同等として良いと見えるほどである。常識的にはツクルに引きずられて〈有意志的〉なナスが使われていると見るのが穏当かも知れない。それがやがてナルになる。

もう一つ例を見ると、

【是に大國主神、愁ひて告りたまひしく、「吾獨して何にか能く此の國を得(え)作らむ。孰れの神と吾と、能く此の國を相作らむや。」とのりたまひき。是の時に海を光(てら)して依り來る神ありき。其の神の言(の)りたまひしく、「能く我が前を治めば、吾能く共與に相作り成さむ。若し然らずば國成り難けむ。」とのりたまひき。】於是大國主神、愁而告、吾獨何能得作此國。孰神與吾能相作此國耶。是時有光海依來之神。其神言、能治我前者、吾能共與相作成。若不然者、國難成。」古事記上卷

この例では、ツクルが「つくりなす」になり、最後にナルになっている。

次のものは、オオクニヌシノミコトが八十神の謀で殺された件である。

【爾に其の御祖(みおや)の命、哭き患ひて、天に參上りて、神産巢日之命に請しし時、乃ち蜃貝比賣(きさがひひめ)と蛤貝比賣(うむぎひめ)とを遣はして、作り活(い)かさしめたまひき。爾に蜃貝比賣、岐佐宜(きさげ)集めて、蛤貝比賣、待ち承けて、母の乳汁を塗りしかば、麗しき壯夫(をとこ)に成りて、出で遊行(あそ)びき。】令作活・・・成麗壯夫」古事記上卷

この例でも、令作活とあって、「令」の字を使いカミムスヒの強い意志が示されている(ように見える)。その「作り活か」す実際の主体はキサガヒヒメとウムギヒメである。それにもかかわらずオオクニヌシノミコトが「壯夫に成」るで終わっている。

ここで三つの用例での使われ方を見ると、

(ア)ツクル→ナス→ナル

(イ)ツクル→ツクリナス+意志の助動詞ム→ナル

(ウ)ツクリイカス+シム→ナル

となるが、どれもツクルからナルという形である。

つまり、一応の理解では、働きかけた側から言うとはツクルであり、その働きを受けた側から言うとはナルということだと、言えるかもしれない。すなわち、一応「ツクッタ」後は、その結果は「ナル」で表す。しかしながらこう解釈しても、ここでは、ナルに移ったということは、「ツクッタ」主体から「ツクラレタ」ものの方へ「すぐに」視点が移ったと言うことを意味し、問題が残る。つまり、どうしてこうも簡単に「すぐに」視点が変わるのか、文法の主語概念を導入すると、主語がほとんど瞬時に変わっている事になり、たとえ主語主体が自分自身の「意志」で行動したとしても、まるで《臨時》の主語であったかのように、あまり間を置かずに、其の対象の方から表現する。つまり、ツクルがここでは完了するようには表現されない。そして、その主語主体の意志が、次に見るように、戦争征討という個人のみならず共同体の「意志」として強力に発揮される、と予想される様な場合にも同様なことが見られる。(もちろん、ここでは、古代における戦争行為の一面しか考慮に入れていない。)

これは、いわゆる神武東征の折、大和平野に進軍しようとする時のものである。

【天皇、又因りて祈ひて曰く、「吾今當に八十平瓮を以て、水無しに飴(たがね)を造らむ。飴成らば、吾必ず鋒刃の威を仮らずして坐ながら天下を平けむ」とのたまふ。乃ち飴を造りたまふ。飴即ち自づからに成りぬ。】乃造飴。々即自成」神武天皇即位前紀

この例では、大筋でツクル+意志の助動詞ム→ナルとなっているが、先の例とは異なる点は「ウケヒ」の場でのツクル→ナルであるということである。さらにナルがオノヅカラナルであることにも注意しなければならない。もう少し原文の表現の道筋を見ていくと、神武の意志とその能力で(ツ

クル), 餡が出来る, と受け取るには少々無理があり, それよりは, ひたすら餡がナツタと言うに近いように受け取れる†。つまり前の例で見た「臨時の主語」の例がここでも, それも強度を増して, 見られるのである。

†:「壮夫に成る」「餡即ち自づからに成りぬ」は事柄の完成乃至成就を表している, ナルはその意味をも含有するのであるからことさら問題にはならない, とする解釈もあり得るが, たとえそうであったとしても, 少なくとも「臨時の主語のような形態」を説明するにはそれでは不十分である。

田ツクルと言って田ナルとは言わず, 稲ナルと言って稲ツクルとは言わないことなどから明らかなように, ナルとツクルは当然区別されて使用されている。にもかかわらず臨時の主語のような形態を取ってのツクルからナルへの移行は, 人間のツクルという意志的行為が最後まで遂行される, とは《意識されていない場合がある》ことを, 示唆していると同時に, 字とその訓みで検討したように, ツクルはナルを必要としていることをも示している。言い換えると, ツクルに「ツクルの支配圏外」が《始めから》†あるということであり, ツクルという意志は完了せず, いわばその支配圏外をナルが分担する。つまり, ここでのツクルはナルと共に働らく。

その場合, ツクルはナルを, 単に補助的に必要としていたというのではなく, ナルはより基本的な契機としてツクルやナスなどの〈有意志〉の働きを支えるものとして発想されていた, と考えられる。従ってこのツクルに人為だけを見るのは適切ではないのみか, ナルに自然の働きだけを見るのも当を失っている‡。(註12)

以上のツクルとナルとの関係には, 人間は十全な意志の所有者ではないことが示されている。これは, 古代日本語ナルとツクルの関係にも, カミのウラナヒに見られたと同様な「余白」を認めることが出来ることを語っている。そしてその余白は, ここで主導的なナルが可能にしていると考え

られる。

さらには, このナルの余白構造が先に見たカミのウラナヒの余白を可能にしていると, 推測されるのである。

†:「始めから」というのは, 例えば, 遂行不可能として中止などのような「経験の後で」「仕方なく受け入れる」ということではなく, いわば経験の前から, つまり原則的に, 予め, ツクルの完全な遂行を予想していない, つまり人間主体の意志遂行の支配勢力《外》を認め受容している。従って九鬼周造の言う「あきらめ」の可能性の芽を含有している(註13), と言えるかも知れないが, 「あきらめ」で余白を受け入れている, というのには遠い。余白を受け入れること自体が既に「あきらめ」ているのだ, という見解もありうるが, 記紀などの実際の用例では, やはり「あきらめ」の色彩には乏しい, と言わざるを得ない。

‡:丸山眞男も引用している『妙貞問答』に於ける「つくる」に関する議論は, 「つくる」という言葉についての非常に重要な問題点を, 恐らくは『妙貞問答』の作者には自覚されていなかったであろうが, 示唆している。ハビアンは, 記紀などに見た「つくる」に対して, キリスト教の信仰からくる「神がつくる」という発想・概念を称揚し, 前者を非難し軽蔑したのだが, 現在われわれから見ると, ハビアンが誇った「つくる」概念の方が却って特殊ではないか, と思えてくる。この「つくる」は自然と人為を截然と分けるものである。従って「つくる」という言葉の意味は, 『妙貞問答』が記紀などのツクルに見たものの方がより普遍的ではないのか, とも考えられるのである。ただしハビアンは日本人であるから, これは日本人がキリスト教の「つくる」Creatio 概念に接しての反応であり, ヨーロッパ人の直接の反応ではない。(註14)

(6) オノヅカラナル

カミ、とりわけ最高神とされているカミに於ても、ツクル、ナス、ウマムなどだけでは不十分であり、そこになおナルを必要とする場合のあることを見てきた。つまり、〈ツクル+ナル=全体〉という場合があるということである。その場合単に補助的に必要としていたというのではなく、ナルはより基本的な契機としてツクルやナスなどの〈有意志〉の働きを支えるものとして発想されていた、と言えよう。「余白」が考えられるということは、まずそういうことを語っている。

そこで、このナル(ハタラキ)をとりわけ強く意識して表現したものがオノヅカラ†という言葉であり表現である、さらには、ナルハタラキに対する驚異、崇敬、信頼、希求の表現がオノヅカラである、と仮に理解すると、ナルは本来的にはオノヅカラナルであり、ナル カミは、本来、オノヅカラナル カミと考えられてくる。

†: この「ナル(ハタラキ)をとりわけ強く意識して表現したものがオノヅカラという言葉であり表現である」という点は、古代日本語ナルの探求にとって非常に重要な意味を持っている、と考えられる。これまでの検討は、この意味でオノヅカラの検討であるとも言えるが、筆者はかつて「古代日本語「オノヅカラ」について」(註15)でいくらか検討した。再点検と新たな視点からの考究が必須であるが、これはナルについて先に述べたと同様に容易な作業ではないが、共にわれわれの本質に関わる課題である。

すると、前記の〈ツクル+ナル〉は、ツクルのハタラキが終わった所からナルが働き出すというのではなく、始めからツクルはオノヅカラナルハタラキの下で働く、との理解も可能であろう。つまり、ツクル(人間の意志と行為)は、原理的にはオノヅカラナルハタラキの一つと考えられるのである†。

従ってここに、オノヅカラナルハタラキに対す

る全面的に近い一種の信頼、あるいは、仮に根源的な直観とでも言うべきものを、仮定せざるを得ない。それは、まず次のようなものと考えられる。(註16)

a) 自覚的・自意識的「信頼」ではない。それはオノヅカラナルハタラキに対する、驚異、崇敬、信頼、希求であるとともに甘え、依頼心、寄り掛かりの契機をも含んでいよう。

b) 従って自覚的意識的になる可能性は残されている。

c) この「信頼」の中では、いわゆる自然と人事の区別は基本的には無いと考えられる。

d) 基本的であるから、自然と人事を区別する水準をも含む。

以上のようなものとして考えてくると、それを古代日本人の根源的・原型的な発想の一つとして、さらには存在感情のようなものとして仮定し、ここでは仮に「根源的な直観」の語を使用した。‡

†: しかし人間的現実という条件が加わると、そうあることは希求であり理想であるというオノヅカラナルハタラキへの反応の半面が存在する。それは、オノヅカラナルハタラキは、そこから離反しようとする人間の意志・欲望〔ツクル、スルのナルからの離反傾向〕の可能性に絶えず曝されているからである。

‡: この《オノヅカラ ナル ハタラキ》への関心が強く前面に出てくる場合も考えられる。従って、場合によっては、「誰が」つまり主語主体は少々後ろに引っ込んでしまうことがあるのである。舞台裏の方に引っ込む場合すら出てくる。先に「ひたすら飴がナッタと言うに近いように受け取れる」と述べざるを得なかったのだが、そこにも同じ事情が伺えよう。(註17)

そこで、我々は古代日本語ナルを可能にする条件として、オノヅカラナルハタラキと共に次のようなことを仮定することとなる。

古代日本人は、世界と人間を「オノヅカラナルという仕方のもの」「そのように働くもの」とし

て受け取り、生きた†。それは生活意識と日本語の根底にあるものの一つと考えられる‡。つまり、カミ、世界、人間(社会)、それらと相互に交渉している自分自身をも、〈オノヅカラナルもの〉として捉えた「根源的な直観」とでも言うべきものを仮設することになる。

そして以上のように仮定することによって、(5)で推測したナルの余白構造がカミのウラナヒの余白を可能にする条件である、ということが可能にすると考えられるのである。

†：例えば、著名なイザナキ・イザナミ二神の婚姻時の「成り成りて」の件を丸山眞男は、【人間の身体各部が「成」ってゆく過程の結果として両性のちがいが出来たという発想】であるとしている(註18)。さらに、日本書紀では質性、長性、稟性、爲人、率性、壯、情性を、風土記では爲人を、ヒトナリと訓んでいる。このうち「爲人」は肉体的な面の方が主であるようだが、その他は性質やその人物そのものを表す色彩が濃い。これは人間もいわば肉体精神両面にわたって〈ナルもの〉であることを表していよう。(ただし、ここでの肉体、精神の語の使用は便宜的なものである。)

‡：生活意識という言葉を使用したのは、ナルが、特殊な語、すなわち祭祀の特別な用語や知識人の言葉などではなく、日常語であるということからである。今この点を詳細に検討する余裕はないが、非常に重要な契機と筆者は考えている。

(7) オノヅカラナルカミ

オノヅカラナルハタラキを前章のように仮設すると、ナル カミはオノヅカラナルカミであり、オノヅカラナルハタラキの頭れである、と考えられるのである。これは古代日本のカミの一面を語っている。

しかしオノヅカラナルハタラキそのものは言葉ないし概念とされることが無く、「ただ」オノヅ

カラと、あるいはナルと、表現されたと考えられる。「不定の神」ないし「無」と解釈される余地はあったのである。

従ってオノヅカラという語も他の言葉で置き換えることは、原理的には不可能であろう。置き換えた場合は当然近似値であり、誤差は大きくなる。オノヅカラの辞書的意味が大抵オノヅカラの実例では、いささか不適切な感を拭えないのはその一つの証左である。

このオノヅカラナルハタラキを端的に表現した一例は、かつて丸山眞男も言及した次の古事記の周知の一節である†。(註19)

【葦牙(あしかび)如く萌(も)え騰(あが)る物に因(よ)りて成れる神の名は、宇摩志阿斯訶備比古遲(うましあしかびひこぢの)神】記上(2章のK2)

すなわち、このアシカビはオノヅカラナルハタラキを表現している。それは見てきたように、いわば世界の根源の運動(世界を動かしている根源的な働き)を「オノヅカラナル」として捉えた、ということの意味する。敢えてここでヨーロッパ語に翻訳可能な表現方法を取ると、自然を実体的に捉えずに、作用的に表象したということである。(註20)(ただし、これは便宜的な語法であって、実体的と作用的という二分法がそぐわないところのあるのは勿論である。)

そこで便宜的に‡、この「オノヅカラナルハタラキ」を「自然」に置き換えると、次のようなことが言える。

(イ)「自然」に最終決定権がある、というように一応理解される。だが、だからと言って「自然」を神とした、というのは不適切であろう。現代語としての「自然」の表象内容そのものを古代日本人は、当然、持たなかった。もちろん別の言葉としても持たなかった。不用意に自然崇拜などの語は使用できない。

(ロ)最終決定権を持つと推測される「自然」の概念が無かったことにより、一面で、和辻哲郎が指摘するような不定の表現にならざるを得ない。

(ハ)従って、表現しようとする場合には、オ

ノヅカラナルと表現することになり、「カミ ナル」「ナル カミ」との表現は、そのような内容を含んでいると思われる。

†:「草木言語(こととふ)」という記紀風土記などに散在する伝承も、その一例として挙げることが出来る。(註 21)

‡: 便宜的としたのは、次章で検討するように、自然という語の使用には細心の注意が要求されるのであるが、現代のわれわれには自然の語での説明は分かりやすく思えることから、問題の所在を示すために敢えて使用した。もう一つことわり書きを記すと、これまで意識的にそれが可能な限り「自然」の語を使用しないようにしてきた。

最後に以上検討してきた問題と深く関連していると思われる二点について、これまでの叙述を補う意味でも、簡単に触れることにしたい。

(補 1) 自然の概念について

ナルやオノヅカラの説明として、「自然展開」「自然に変化して」などが挙げられることが多い。そこでこの点を糸口にして行くことは、問題の所在を明らかにする一つの便法と思われる。

例えば手近なところで、岩波古語辞典 補訂版「基本助動詞解説」「基本助詞解説」の解説は、直接ナルやオノヅカラに関してではないが、日本語の基本語である助動詞と助詞を「自然と人為」を原理として分析していて、これはこれで見事な説明・解釈の一例と言って良いであろう。

【(助動詞)「る」「らる」は動作・作用・状態の自然展開的・無作為的な成立を示すのが基本的な意味であった。】(註 22)

なぜ「見事」かと言うと、截然と分けられた自然と人為を区別原理とすることによって、明確な説明が可能だからである。その場合、「自然展開」「自然に変化して」などは、おおむね、《人間の手をかけないで》ということの意味している。つま

り、自然と作為ないし人為という二項の説明原理は、(たいてい自然と人間の二元論に立つ)われわれ現代人には非常に明解で分かりやすく思われるのである。

そして、そのように区別されて使用されたように見える例が、記紀などの古代文献自体にも多く見られる、ということも一応認めなければならない。

しかし、古代日本の言葉を対象にする時、例えば本論の検討の主要対象であるツクルやナルの用法からすると、問題はそう簡単明解にはいかない。すなわち、「自然生成」「自然展開」と説明されている言語現象に、人事人為が含まれる場合もあるということである。ここでは自然と人為・作為が単純な対立関係にはない、と考えられる。

従って、自然と人為は対立関係にはない、という水準も考えられなければならない。これは普通の人為概念からは逸脱している。ということは、ここで不用意に自然の語は使用できないことを示唆する。

そこで自然の語に関する注意点の二、三を、改めて言うまでも無いことを含んではあるが、挙げてみたい。

1) 「自然展開」などの「自然」は現代日本語である。

2) 現代日本語としての「自然」は、nature 概念の影響を受けて、意味内容が付加され(その一例は Natural Science の自然観を受け入れている、ということである)、変質しているところがある。(日本語本来の自然は名詞ではない。)

3) 現代語としての自然は、西谷啓治の次の発言に於ける意味での「超越性」を失う傾向にある。

【「物質」を基底とする自然界という世界像が、世界からも、世界のうちなる人間からも、「超越」の次元への通路を除き去ったのである。・・・神も仏も無くなったといふ、超越の場に於ける虚無である。】「現代文明と禪」(註 23)

補:【祭るということは、なんらかの超越者(神とか仏とか「自然」とか)との交感つまりコミュニケーションをもつことである。】橋本峰雄(註 24)

これに対して、オノヅカラやナルには一種の超越性(nature と supernature とに截然と分けることから来る超越性とは別種の超越性も考えられるべきであり、先述来の「余白」もその意味で一種の超越性を持っていると考えられる)があると考えられることから、現代語としての「自然」概念によって古代日本語オノヅカラやナルを規定しようとするには危険性もある。同様に、Animism, Manatism などの概念装置も、近代現代の発想から作製された装置と考えられることから(やむを得ない面も確かにあるが)、古代日本人の基本的発想・精神構造・心性を捉えるための概念としては、ヨーロッパ出自の概念・理論は、ほとんどすべて根底からの再検討が必要であるのではないかと思わざるを得ない。

ヨーロッパ産の基本概念を使用しながら、日本固有の現象・対象に「ふさわしい」いわば枝概念を作出する、という絶妙な操作をしてきたのが、ほとんどのこれ迄の行き方であった。しかし、基本概念は、固有の対象にふさわしいものであることと普遍性を持つことの微妙なバランスの上に立つことが要求されるはずである。

そういった意味では、普遍性を持つと受け取られてきたヨーロッパ産の基本概念も、まだ幾らかのヨーロッパという特殊性を持っていると見なさざるを得ない。

この問題の一例として、「超自然」というよく使用される語を挙げたい。「超自然」を学術用語として、「我々」が使用することは拒否されるべきであると考え。この語の使用は、日本(とは限らぬが)の固有性を無視している、と同時にヨーロッパ思想における nature と supernature の重要性にも盲目である。

さらに近年「ヨーロッパ」側からも自らの「特殊性」についての反省が生まれつつある、と言えるような状況ではあるが、大事なことは彼等が、ではなく、まず《我々》が「反省」することであり、われわれは「ふさわしい」概念を作り出さなければならない責務を負っている。その主な理由は、彼等が自己の特殊性に気が付くこと自体はその驚くべき実力を語っているが、実際にその対象

にふさわしい概念装置を作り出すことは、その意志があっても彼等にはいささか困難であると考えられるのと(自然との分離は概念だけでは済まず、キリスト教が強力に養ってきたと思われる、基本的な発想ないし感性とでも言うべきものを超越することは容易ではない)、われわれの「自立」ということである。これは大きな問題であって、ここでは詳細に論じる余裕がなく、「舌足らず」であるのはやむを得ない。

4) 一方、現代日本語としての「自然」には、日本語として過去の遺産、つまりオノヅカラやシゼンやジネンなどの語意の残存がある。

5) 日本語としての「自然」概念をわれわれは未だ十分には自覚化し得ていない。

従って、学術用語がおおむね現代語であることは当然であるが、自然の語を古代日本語に適用する場合には、特別な用心が必要であることは明らかである。そればかりか、この自然の問題は原理の問題であると考えられるのであって、容易に片付く問題ではない。

さらには自然と nature を架橋する概念の創出は、それが果たして可能であるか問題ではあるが、われわれに課せられている、と言えよう。

(補2) いわゆる日本的心性について

湯浅泰雄氏はその『古代人の精神世界』で(註25)、本居宣長と丸山眞男は「不変の」日本的心性†を前提していると批判している。その批判が当を得ているかは今しばらく置くとして、そこには考えるべき点もある。かつて九鬼周造はオノヅカラには「あきらめ」があるとした。それについては既に触れるところがあったが、そこで述べたように記紀風土記などのオノヅカラに、直接「あきらめ」を見ることは難しかったのは確かであるが、また「あきらめ」の芽、可能性を含有していたことも十分考えられるところである。現在の筆者の立場はそういうところにある。

†: 小論で検討した事象も、日本固有ばかりで

はなく「他の文化圏」でも見出せる、との可能性は十分考えられるが、ここでは、まず検討を日本に限った、ということである。

以下に、「余白」のまとめを箇条書きしてから、そのような芽の幾つかを挙げることにし、その後で後世の反響の一例を見ることにしたい。

1) カミの計画書・企画書には書かれていない空白部分がある。先に述べたように、ウケヒやウラナヒにその意志を表すカミが特定の名前の神である場合もあるが、多くは和辻哲郎の指摘の如く不明である。従って誰が最終決定者なのか不明の場合もあるということであり、果たしてそれが最終決定であるのかも不確かである。すなわち意志は明示的ではない。

2) それはやがて人間の意志だけでは完結しないことを示している。意志は空白部分(余白)を持ち、原理的には全面支配しない。

3) カミも人間も自分だけでは完結しない、という意味で、偶然が受容されている(註26)。ここにもオノヅカラナルを自然必然と規定することの問題性が表れている。

4) 「余白」に予め《他》が書き込むことを(必ず書き込むとは限らないが)予想し許容している。そのような姿勢をナルは含んでいる。つまり原理的に、他が「書き込む」ことを許容している。それは意識が本来的に自己(意識)でないものに向かって開かれていることをも意味している。(と同時に中途での努力放棄の可能性をも蔵している、と言えよう。9章参照)

5) ナルの余白構造がカミのウラナヒの余白を可能にしている、と考えられる。

6) ナル カミはオノヅカラナルカミであり、オノヅカラナルハタラキの顕れである、と考えられる。

次に前述の「芽」のいくつかを挙げる。

(1) ナルには「現状肯定」「逃避」を許す傾向・可能性がある。人間の十全な計画性・企画性を拒否する姿勢がある。すなわち、計画企図は不十分で未了であるのがナルの本来であるから、人間の十全な努力と不十分な努力(極端な場合は努

力放棄)の両端の可能性を始めから含んでいる。

(2) 《他》が書き込ことを許容しているナルは、現状肯定などに傾きやすい、つまり「なるようになる」「なるようにしかならない」などの、一種の努力放棄や特定の意図の「隠れみの」になる可能性、をも示唆する。後者に付け加えると、ナルの余白構造があってはじめて、例えばウケヒの隠された意志(ウケヒ全部がそうではないが)の表現・現実化が可能となる、と考えられる。

(3) ツクルがナルの土俵から離れていき、対立し、時にはナルを、ひいてはオノヅカラを否定する可能性もある。例えばハカラヒなどが否定的に使われる場合である。従って、例えば親鸞の自然(じねん)や「はからひ」などに直接古代日本語のオノヅカラを見ることは当を得ない、と思われる。

(4) 表現も自己完結性を持たない場合がある、と考えられることから、いわゆるアイマイな表現、全部言わない等々を産む可能性がある。

以上は思いついたものを挙げたに過ぎない。最後に、後世への影響と筆者が考えているものの一例を挙げることにしたい。

「句作りに、成るとすると有り。内をつねに勤めてものに應ずれば、その心の色句と成る。内を常に勉めざるものは、ならざる故に私意にかけてする也。』『三冊子』(註27)

「生活があつて詩がある、そういう歌がよい歌だと思ふ。ことさらに詩的であろうとするのではないが、日々の生活のなかに擱んで歌のかたちになるものには、おのずから詩がある。感動の核があるといつてよい。」上田三四二(註28)

ここに見られるものは、いわゆる「日本的心性」の特徴を顕著に示していよう。芭蕉の言葉には、上田三四二の使用したオノヅカラの語を欠いているにしても、同じ含みがあろう。先述のように、ここに顕著に見られるナルとスルの対立は、記紀などにはほとんど見られないか表に現れない、と言つてよい。しかしその対立の芽はすでに在ったと考えられるのである。

註

- (1) 例えば、石田英一郎『東西抄』筑摩叢書 昭和43年、など枚挙にいとまがない。以下を参照：湯浅泰雄「かたち-日本思想の深層」、岩波講座 東洋思想 第一六巻『日本思想 2』1989 所収, p. 6f. 佐々木宏幹『聖と呪力の人類学』講談社学術文庫版 1996, p. 25f など。橋本峰雄『「うき世」の思想』講談社現代新書, 昭和50, p. 155f.
- (2) 記紀風土記万葉集の本文は主として岩波古典文学大系本に依る。それは、国文学研究資料館が大系本をデジタル化したものを使用したからである。特に第四章の字訓の検討はこのデジタル版によって可能となった。引用の仕方は、訓読本文を主とし【 】記号を使用する。必要な限りの原文を付記し、「記号でくくる。原本の訓を（ ）内に記す。なお〔 ）内は筆者の説明である。
- (3) 丸山眞男「歴史意識の「古層」」、筑摩書房 日本思想 6 1972 所収
- (4) 管見では、〈「なる」の論理〉として神島二郎がその著『日本人の発想』講談社現代新書 昭和50 p. 107 で使用している。
- (5) これはこの小論の叙述の都合上の、非常に大まかな便宜的区分であり十分なものではない。さらに綿密な分類が必要である。例えば、万葉集には〈これこれの「時」にナル〉という用法がある。
- (6) 和辻哲郎『日本倫理思想史 上』第一篇第二章 全集 12
- (7) これは註2で触れた、国文学研究資料館作成のデジタル版があつて初めて可能となった。
- (8) ここでは岩波古語辞典の説明に従う。
- (9) 註7 参照
- (10) 丸山眞男 同前 p. 43 上 注6；岩波日本思想体系『キリシタン書 排耶書』所収『妙貞問答』特に p. 153f 参照
- (11) この字と訓による考察は、その資料の活用が非常に不十分であることをお断りしなければならない。
- (12) 【「なる」という言葉の用例をみていくと、じつはそこに偶然も作為もふくまれており】神島二郎 同前 p. 107。ただし神島二郎の指摘は古代日本語ナルに限られているわけではない。
- (13) 九鬼周造『人間と実存』「日本的性格」三一三頁「自然に従ふといふことは諦めの基礎をなしてゐる。諦めとは自然なおのづからなものへの諦めである。」ただし、九鬼周造の見解は古代日本語のオノヅカラに限られてはいない。
- (14) 註10 参照
- (15) 「古代日本語「オノヅカラ」について」『東京工芸大学工学部紀要』人文社会編 VOL. 4 1982.2
- (16) 直観の語を使用するのは唐突の感を免れないが、ここでは詳細に論ずる余裕がなく極めて不十分な説明である。
- (17) 参照：和辻哲郎「神命の通路が前面に出て神自身は後に退いている。」同前 p. 61
- (18) 丸山眞男 同前 p. 9
- (19) 丸山眞男 同前 p. 12 上
- (20) 参照：和辻哲郎 同前、前記第一篇第二章で和辻哲郎はノエシス、ノエマという概念を使用している。
- (21) 拙論「草木言語」伝承考』1985.6『宗教研究』264号でこの「草木言語」について少々検討した。
- (22) 岩波古語辞典の基本助動詞解説 一四七〇頁上、大野晋
- (23) 西谷啓治著作集 11, p. 163
- (24) 橋本峰雄『「うき世」の思想』講談社現代新書 昭和50 p. 160
- (25) 湯浅泰雄『古代人の精神世界』1980 p. 1ff
- (26) 神島二郎 同前 註12 参照
- (27) 岩波日本古典文学大系 66『連歌論集 俳句論集』p. 401
- (28) 上田三四二『短歌一生』講談社学術文庫 p. 19

跋

この小論は故玉井実先生のお薦めで書かせて頂きました。この9月3日に思いもかけない事故で急逝されましたことは痛恨の極みです。拙いこの小論を玉井先生の御霊前に捧げたいと思います。2000.9.18